

---

# きっと恋ではない

りいち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつと恋ではない

### 【コード】

N1700F

### 【作者名】

りいち

### 【あらすじ】

好ではない、愛してはいない。だけどこの感覚は、ずっと抱いていたもの

「そしたらねえ、何て言ったと思う？」

大きな目を更に大きくさせ、リサは言った。

いきなり部屋に入ってくるや否や、ベッドにもたれて本を読んでいた俺の目の前に座り、物凄い勢いで自慢話をはじめたのだ。

3つ年下で高校三年の幼なじみ。家が隣同士の俺たちがお互いの部屋を行き来するのはもう随前から暗黙の了解として認知されていた。

俺は内心ばかばかしい、と思いながら分からない、という風に首を横に振る。

待ってましたと言わんばかりにニヤリと笑ったあと、リサは言った。

「好きだから付き合ってくれて言ったのよ。私に」

「へえ」

「私びつくりしちゃった。好きだから付き合うなんておかしいと思わない？だってそれまで普通に友達として一緒にいたのに今更何言ってるのって。ねえ私間違えてる？」

「いや、正しいと思うよ」

「そつでしょっ？」

「ああ。なあそれよりリサさあ、キスしようか」

さつきからリサの手が俺の太もみに微妙に添えられているせいで  
そういう気分になってしまった。男なんてそんなもので、少しのこ  
とでも反応してしまう悲しい生き物なのだ。

キョトンとした顔で俺を見たあと、何で？と首を傾げるリサ。そ  
の唇に引かれた淡いグロスも、無知を装う計算されたその仕草も自  
分で思っている程、可愛くはない。

「何でって、リサのことが大好きだから」

「嘘つき」

「うん、嘘。ただしたくなっただけ」

「初めからそう言えばいいんだよ」

俺はリサの首に手を回し、自分の元に引き寄せた。その薄い唇に  
かぷりと軽く噛みつくくとグロスの味が広がった。ああ、気色が悪い。  
早くその味をかき消そうと更に激しく舐めてやればリサの手がそ  
れを制した。

「彼女いるくせに」

「知ってたのかよ」

「うん」

「あれ、そういうの嫌だっけ」

「別に。言ってみただけ」

「へえ」

本当は気にしてるくせに強がりだけは一人前。

嘘だろ、と俺が言うその前に、彼女の口から嘘よ、と零れた言葉。ぼつりと呟くその悲しそうな顔を見ても罪悪感なんかこれっぽっちも浮かばない。

「私、好きなんだよ」

「知ってるよ」

昔から馬鹿のひとつ覚えみたいに好きよ好きよと彼女なりの愛とやらを囁く。それはもう耳にタコができるくらい。今日みたいに自慢話を持ってきては俺にヤキモキを妬かそうと必死になり、次の瞬間にはまた好きよ好きよの繰り返し。言えば言う程その言葉の価値を下げることを知っているか。

「ねえ、どうして伝わらないの？」

「さあ……どうしてかな」

リサは酔っているのだ、その言葉に、自分に。好き、という純粹で甘美な言葉の響きに浸り、報われない恋をしている自分に酔う。なんて浅はかで、哀れ。

彼女は知らない。俺がこのばかばかしいやりとりを密かに楽しんでいることを。

きつと恋ではない

( そんなこと、認めない )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1700f/>

---

きっと恋ではない

2011年1月18日22時20分発行